

うということではなく、自分でできないことを周りの人に適切にお願いすることも必要になります。つまり、①「できることを増やすこと」②「要求手段を身につけること」を今回の目的としています。その結果、情緒の安定へ繋がることも成果として期待しています。

Ⅲ 研究の経過

1. ケース児童紹介

I. Yさんは現在21歳、自閉症・重度知的障害と診断され、「感覚の特異性」「目で見てわかるものに強い」「焦点の当て方が狭く強い」「記憶のアンバランスさがある」「『待つ』などの曖昧な時間が苦手」というような特性が確認されています。今年度途中より「強度行動障害特別処遇事業」の対象者（39/55点）です。

2. 実践内容

1) 実践前の状況

以前のI. Yさんは、「指示待ち」になる場面（自発的に活動せず、支援者に促されるのを待つ）が多く、見通しが持てなくなると不安定になり粗暴行為や器物破損に至ることが多くみられていました。また、自発的な要求も殆ど出せませんでした。

2) スケジュールの活用

生活やその他の見通しをもって過ごしてもらうために、一日の流れが視覚的に伝わるよう、スケジュールを提示しました。狙いは、「いつ、どこで、何をするのかを伝えること」「日々生活には変化があることを伝えること」「余暇の過ごし方を明確にすること」です。また、この取り組みと同時に、家庭でも活かせるスキルの獲得（掃除・片づけなどの手順を身につける）を目指し、家庭でも共通の課題を作ることで、家庭との連携を図ろうと考えました。この結果、当初は職員の指示なしに活動へ移ることが増え、行動が落ち着きました。提示するにあたり、当初、提示例を作成（職員に周知してもらうため）したため、毎日が同じような流れとなってしまう、その結果、普段と違う流れになった時には不安定になることがありました（気付いた時点で修正をしたため、現在はいろんな流れに対応できるようになっています。）。

3) コミュニケーション支援

スケジュールを提示して暫くすると、再び「指示待ち」な状況が見られるようになりました。ここで原因として考えられたのが「要求場面での置き」でした。ということで、自発的なコミュニケーションの獲得を狙い、初めは居室に固定式の「コ

自閉症支援の実践（I. Yさんの場合）

柳沼 秀明¹⁾

1) 青森県立八甲学園 子ども支援課

Key Words : ①自閉症の特性理解 ②コミュニケーション支援 ③強度行動障害

I はじめに

現在八甲学園には、自閉症・自閉的傾向を有される方が多く利用されています。自閉症とは①社会性・対人関係の障害②コミュニケーションの質的な障害③興味・関心の限局性などによる判断基準から診断される、知的障害とは異なる（発達）障害です。

我々は、利用されている方一人ひとりが持たれている「強み」「弱み」を理解し、支援へと繋げていこうと考え、この取り組みを開始しました。

II 目的

最終的には自立を目指します。自立は何でも自分で行

コミュニケーションボード」を設置しましたが、自発的に活用するには至りませんでした。原因として、①どの場面で使って良いのかわからないのではないかと、②文字だけでは意味理解が難しいのではないかと、と予想されたため、文字に写真を加えたものへ改良しました。これにより、自発的な要求を出せるようになりましたが、スケジュールが掲示された場所へ職員を呼び込まなくては要求できませんでした。そのため、携帯式（東）にし、持ち運べるようにしています。結果、携帯式にした事により、自らのタイミングで要求を出せるようになり、自発的な要求が習慣化されました。

4) 自立課題の設定

余暇時間の調整（メリハリをもたせる）、作業手順（ワークシステム）の獲得、作業スキルの向上、労働の成果を知る、部屋で過ごす時間を設けるといふ狙いがありました。これにより、作業手順の教え方が身に付き、同時に余暇時間のメリハリをつけることには成功しました。今後の改善点としては、これまでの課題が目で見えてわかるように整理されていない箇所があり、実際 I. Yさんが持ち合わせている「記憶の強さ」に頼っているものが多くありました。記憶で繰り返すだけの課題ではなく、日々変化のある課題を設定したり、視覚情報だけで取り組めるような課題を増やすことで、いろいろな伝え方を身につけてもらおうと考えています。

IV 結果・考察

様々な時間の過ごし方を目で見えてわかるようにしたこと、コミュニケーション手段を獲得したことで、生活の質は格段に上がったと思われれます。具体的に、促されなくてもできることがわかったことで生き生きとした、一人でできることを知り自信が出た、自分がしたいことや助けて欲しいことを人に訴えることで生活に幅が出た、というようなことが挙げられます。

今後の課題としては、コミュニケーション場面のさらなる充実、家庭や関係機関との連携強化、余暇時間の充実、さらに、I. Yさんのことを周囲の方に理解していただくための取り組み（地域で暮らせるために）、などが挙げられます。

V まとめ

自閉症でも様々なケースの中で、今回は I. Yさんのケースを取り上げました。今回、取り上げたことにより自閉症について少しでも知って頂ければ幸いです。I. Yさんの場合は聴覚等からの情報・刺激に弱く、

ストレスも大きく感じてしまいます。その反面、視覚優位な面があり、目から入ってくる情報は処理されやすく、「目で見て分かるようにすること」「わかりやすく情報を整理すること」で、持っている能力を最大限に生かし、充実した生活を送ることができると感じました。わかりやすく伝えるためにはその方の状況・特性を知ること、その上でわかりやすく工夫することが大切なのではないかと思います。